

非職業画家による長期的描画実践がもたらす一人称的効果と意義 —一人称研究とアートベース・リサーチの複合的視点から見る、生きる軌跡—

岡澤 卓弥

本研究では、著者である私が、長期的・反復的に絵を描き続けるという実践を行う中で「既存研究で言及されているような精神の安定や自己理解の促進、創造力の涵養といった、一般的に絵を描くことで得られるとされる効果は私自身にも当てはまるのか？当てはまるとしたら、具体的にどのような過程のもと生じるのか？」「私が『ドロドロ』という表現を体得するに至った背景に何があり、そこからどのような自己を見出せるか？」「趣味として絵を描く人、いわゆる非職業画家が、AI 画像生成もある現代で絵を描くことによるその人にとっての意義とは何なのか？」という3つの問いに向き合い、もたらした一人称的効果を明らかにしたいと考えた。

本研究では、一人称研究手法とアートベース・リサーチ（以下、ABR）の2つの研究手法を併用した。一人称記述では、描画実践後に一人称視点から感じ取った体感や、実践中の思考などを記述した。アートグラフィーでは、長期的に描画実践を行う中で感じたことや、作品自体を一步引いた視点から振り返りプロセスや出来事に対する省察を記述、分析した。作品制作について、前半は1ヶ月に1作を目安に大型作品を作成していたが、後半は毎日一作品を目安に制作を行う「一日一描」を行った。結果、7つの大型作品と、93日間の一日一描を行い、45個の一人称記述と、31個の出来事に対するアートグラフィーと、高校生時代の1作品を含めた8個の大型作品に対するアートグラフィーを記した。これらの記述からエピソード抽出や、Expressive Therapies Continuum 理論による分析を行い、問いに沿って考察を行った。

結果として、自己理解の促進と、創造力の涵養は見受けられたが、精神の安定は主観的には見受けられなかった。また、自己理解が進む様子をドロドロという無意識的に好む表現を手掛かりに探求した結果、思春期の居場所の無さや、日々の葛藤、アイデンティティの搜索といった苦しみの中、単調化や絶対化する社会への違和感を訴える手段として、不定形で不安定なドロドロという表現を好んだのではないかと考えた。更に、非職業画家は素直で複雑な自己を外在化でき、自己理解を深められ、美的鑑賞できるという強みを感じた。また、自己理解を進めた結果、自己と他者の違いに気づき、決断と視点の違いをマトリックス図化にて分類し、自身の生きづらさの解消につなげることが出来た。

本研究は一人称研究と ABR を組み合わせた初めての試みであり、言語化による分析を手段とする一人称研究と、アート表現を言語化せずに分析する ABR という二つの手法の特徴の矛盾点にどう折り合いをつけるのか、に挑戦したことも学術的貢献がある。データ数が多く、記述量も膨大となり、データからの読み取りが困難になるという課題が浮き彫りとなり、一人称研究と ABR の組み合わせに工夫の余地が示唆された。

（指導教員 松原 正樹）